＜発表＞

孫文に協力した山田良政・純三郎兄弟の活動について
―恵州起義から第三革命までを中心に―

愛知大学非常勤講師　武井義和

武井　武井でございます。よろしくお願いいたします。本日私の報告は、辛亥革命そのものよりも、孫文に協力した山田良政・純三郎兄弟という人々を取り上げていきます。山田兄弟は回想類などを著さなかったので、近年まであまり知られてこなかったんですけれども、孫文が高く評価した人達であります。今日お昼に展示室を一般公開いたしましたけれども、そちらの展示室にはこの兄弟に関する多くの資料がございます。今日ご覧になった方も見えると思いますが。

そういうこともありまして、本日は主に記念センターで公開している資料を用いまして、彼らの生い立ちから兄弟の革命活動における軌跡などを、すでにある程度著作類でも明らかにされている部分もありますので、そういった内容と照合させて、より鮮明に浮かび上がらせていきたいと思います。

従って、学術的な内容というよりも資料紹介のような形になるかと思いますが、一方で山田兄弟が孫文の協力者として革命に関わっていく背景についても、特に純三郎が中心になっていくと思いますが、若干考えていきたいと思います。時間の関係で少し早口になりますことをあらかじめご了承ください。

まず山田良政ですが、展示室にも写真が展示されています。孫文と並んで写る弟の純三郎、辛亥革命のニュースを聞いて欧米から帰国した孫文を、純三郎が香港まで出迎えた時に、船の上で撮られた写真もあります。また、『建国方略』という孫文が記した文章の日本語訳をご覧いただきますと「それ革命に奔走し終始怠らざる者はすなわち山田兄弟」というふうに名前が挙げられております。いかに彼らが孫文から信頼されていたかがお分かりいただけるかと思います。こうした山田兄弟はどういう人達であったか、その生い立ちから順番に、駆け足になりますが見ていくことにします。

山田兄弟は弘前藩士山田浩蔵の子供として、青森県の弘前に生まれました。良政は地元の学校に進学して青森師範に進むんですが、やむをえぬ理由により退学となります。進路に困りまして上京し、東京の陸羯南、明治時代のジャーナリストとして有名ですが、藩閥政治を批判した人物としてよく知られています。彼のもとを訪ねて進路相談をします。陸は「これからは清国の時代だから清国へ行け」と。しかし何の技術も無くて渡るのはいかんので、まず技術を身に付けてから渡れ、という勧めがあったんですね。その勧めを受けて水産伝習所というところにまず入ります。現在の東京海洋大学の前身です。1年後卒業し北海道昆布会社に入社。上海支店に勤務となります。ここから良政と中国との繋がりが出てきますけれども、上海に渡って4年後、日清戦争通訳官として従軍していきます。

弘前の山田兄弟の生家は、陸羯南の家の道を挟んだちょうど真向かいにあったんですね。ですので同郷どころか、道を挟んだ隣同士の間柄という関係でした。先ほど言ったように上京した良政に対して「これからは清国の時代だ」と。清国へ技術を身に付けてから渡りなさいと諭したことで良政は水産伝習所に入ったわけです。

上海に赴任してきた直後の良政の写真の中には、会社の同僚達と写ってるのもありますが、この数年後に日清戦争が勃発しまして、良政は従軍通訳として出征していくことになります。良政が日清戦争勃発直後に上海から父親に宛てた

手紙には、「陸戦の節には、如何に虚弱なる私においても何らかの役に立ち申すべく」と書いてあります。戦争で何かの役に立てれば立ちたいというようなことが書いてあるわけなんですが、彼は若くして亡くなったこともあって、彼の心境を知ることのできる資料が非常に少ないですね。その意味で今回この父親への手紙を重要な資料と思って挙げたんですが、日清戦争の頃の、革命活動に関わる以前の良政の心境を窺い知ることができる貴重な資料ではないかということで、ここではご紹介しております。

そして下の写真は日清戦争従軍通訳者達の集合写真なんですが、2 列目右より 4 人目が良政です。この頃はまだ孫文と良政は関わりを持っておりません。孫文がハワイで反清朝の組織である興中会を起こしたのが 1894 年ですので、まだこの頃は良政、そして孫文との間にまだ接点はございません。

しかしこのあと良政は、日清戦争後中国の革命に関わっていくことになります。そのきっかけを考える場合、2人の人物が大きな鍵となってると思うんですね。その1人が瀧川具和という海軍の軍人です。もう1人は言うまでもなく孫文なんですが、まず瀧川と良政との出会いというのが大きな転機であったと思われます。

瀧川は海軍軍人で、日清戦争後は武官として台湾総督府に勤めていたんですが、戦争後に良政も台湾へ赴任して両者は出会います。97 年に瀧川は北京の日本公使館付武官として台湾から華北に異動するんですが、その縁で良政も台湾から北京に移ったと伝えられています。その翌年の戊戌政変の際に、梁啓超、康有為といった改革派が西太后ら保守派の巻き返しによって弾圧されていた戊戌政変の際に、彼は王照たちの救出に当たります。良政らの尽力によって王照は日本に亡命しまして、良政は陸羯南のもとに王照の身柄を預けます。

こうした形で、まずは瀧川を通じて変法派（改革派）との繋がりがまず出てくるわけです。ところがその翌年東京で孫文と良政が出会うことで、革命派への支援に変わっていきます。孫文の協力者であった平山周という人物の紹介によって両者は出会ったと言われるんですが、その場で良政と孫文は意気投合したと伝えられています。おそらく革命思想を孫文が大いに語ったと思うんですけれども。一方で 1897 年以降、この瀧川具和の指示の下で、良政は山東省とか旧満洲における列強の進出状況を調査して歩いたと伝えられています。おそらくそうした経験も、孫文の革命に参加していく背景の1つだったのではないかと推察されます。

翌年南京同文書院教授として南京に赴任するんですが、数ヶ月余りで辞職します。そして孫文が起こした中国南部の広東省における恵州起義に参加して亡くなるわけです。そういう人生を歩みました。下の写真は日清戦争後の良政なんですが、前列中央にいます。日清戦争前と違って弁髪に中国服姿となっていて、中国人に成りきっている様子が分かります。そして1900年に孫文は恵州で清朝打倒のための起義を起こします。

1900 年9月末に南京同文書院を辞職した良政は、台湾に行きまして児玉源太郎台湾総督、そ

して後藤新平民政長官に武器援助などの協力を取り付けます。それによって恵州起義が勃発しますが、しかしその直後、日本国内ではそれまでの山縣有朋内閣から伊藤博文内閣に交代しました。伊藤内閣は清国への不干渉主義をとっていたこともありまして、児玉や後藤らが良政に約束した支援は反故となってしまうわけなんですね。そうした状況の変化を知った孫文は、決起を起こした軍隊に対して状況の変化、そして臨機応変の対応を指示するために良政を含む同志数人を派遣します。良政らが起義軍に状況を伝達したその後、途中で清国の兵隊に遭遇し、捕らえられて処刑されたと言われています。享年 33 の若さで亡くなり、良政は中国革命で初めて命を落とした外国人だと言われています。

1913 年、孫文が日本を公式訪問した時には追悼文を書いています。記念センターには「山田良政先生墓碑」という題字の下に良政への追悼文が認められた書幅があります。「人道の犠牲興亜の先覚なり」というような文がありまして、その碑文が篆刻された石碑が東京谷中の全生庵に今でも残っています。碑文のほうには「山田良政君碑」という形で、「先生墓碑」とはちょっとタイトルが違ったりしてるんですけれども、こちらの文章が碑にも篆刻されています。現在、碑の下のほうには穴が開いて欠けている箇所があるんですけれども、それは戦時中 B29 の焼夷弾の破片が当たったためと言われています。1913 年2月、孫文の公式訪問中にこの碑が建碑されるんですが、建碑には山田一族、そして関係者が一堂に揃った写真も残っています。

これが洪兆麟という人物で、恵州起義の際良政を処刑した軍人です。当時は清朝軍人でしたが、この当時 1910 年代は孫文の部下でした。第1次広東軍政府期の 1918 年、自分が良政を殺したと純三郎に告白したことで、良政が処刑されたことがはっきりと判明したんですね。実はそれまで良政の生死というのは不明扱いでした。まあ死んだだろうと思われていたようなんですが確証がなかった。この洪兆麟の発言によって亡

くなったということがはっきりと分かったという経緯がありました。

ここまで駆け足で話をしてきましたが、次にそうした兄良政の遺志を受け継ぐような形で、弟の純三郎も革命に関わっていくようになります。次から山田純三郎についてご紹介していきます。

まず革命に関わるまでの純三郎なんですけれども、同じく山田浩蔵の三男として弘前に生まれております。そして南京同文書院の学生として入学していきますが、その在学時に山田良政の紹介で孫文と上海で会っております。ただこの時は中国語が分からなかったので、何も話さず、ただお辞儀だけを孫文にして別れたと彼は後に回想しております。この南京同文書院は、近衞篤麿の教育理念の下で、李廷江先生のお話にも関わってくるんですが、日中友好という観点から作られた学校です。

ところが義和団事件によって南京も政情不安になったために、南京同文書院は上海に移転しました。そしてその後、上海で東亜同文書院として再出発して日本敗戦まで当地にありました。純三郎はこの移転した東亜同文書院で事務員兼助教授という形で勤務をします。日露戦争が勃発しますと陸軍通訳官として出征し、戦後は満鉄に入社します。入社 2 年後の 1909 年に上海に転勤しまして、三井物産上海支店内で勤務

していくことになります。実はこの上海転勤が、純三郎が革命に関与する大きな転機となってくるんですが、それは少しあとでお話をしてまいります。

こちらが東亜同文書院時代の純三郎です。前列中央の帽子を被った人物が、同文書院に勤務していた頃の純三郎です。そして満鉄に勤務

した頃、奉天満鉄出張所所長時代の純三郎が妻キヨと写っている、新婚当時と思われる写真もあります。奉天満鉄出張所の所長だったこの頃に、純三郎は満鉄が経営していた撫順炭鉱の石炭の販路の拡大を進言します。それが採用されて上海に赴任していくことになるんですね。そして三井物産の中にデスクを置いて勤務するわけなんですが、この時の経験が純三郎に影響を与えたと言われています。

純三郎が革命に関わった背景として、意識の側面からまずちょっと見ていきたいと思います。三井物産に赴任したことがきっかけとなった上海転勤がある種転機となったと申しましたが、上海での商売の実態に失望したことを、山田兄弟の甥の佐藤慎一郎という人がまとめています。これは馬場先生も以前ご指摘になっていましたけれども、三井が石炭を販売する時に目方(秤)をごまかして不正行為をやっていたと。また逆に三井が相手先に石炭を販売する時に、賄賂をあげないと買ってくれない。買ってくれたとしても「質の良い石炭じゃない」と言って騒ぎだす。そういう商売の実態を目の当たりにしたそうで、「こんなことは男のやるべきもんじゃない、少なくとも私はそんなことはやらない、という意識を持って自分は中国革命に情熱を傾けるようになったんだ」と純三郎が述べたということがこの本の中で記されております。

もう1つ考えてみると、良政への思いというのが当然出てくるわけです。これは「遺志の継承」、そして「追慕の念」としてここでは挙げましたけれども、革命に参加して命を落とした良政、その良政の遺志を受け継ぐという純三郎の意思がやっぱりあったんじゃないかと思われるわけです。伊東知也という、宮崎滔天とも親交のあった人で孫文の協力者の回想を挙げておきました。時間の関係で読みませんけれども。

一方「追慕の念」ですけれども、これは肉親良政を思う気持ちですね。晩年の昭和30年(1955年)の手帳を見ると「良政戦死の日」という記述が彼の命日あたりにあります。こうしたものが書かれている手帳は記念センターの展示室で公開しています。そうした肉親良政への追慕の念といったものも、彼が革命に関わっていった心理的背景の1つではないかと考えました。

もう1つ考えてみますと、今度は人脈の面に関わってくるんですが、純三郎の革命関与について考えていく場合、唐突に表舞台に立ち現れてきた感が否めません。純三郎はいつ革命に関わったか、正確な日時、そしてそれに至る経緯が不明でございます。本格的な革命の関与は、佐藤慎一郎の記述などからすると、おそらく1908 年以降ではないかと思われます。純三郎が初期段階で関わった、確認できる革命関与として、まず辛亥革命勃発直後に陳其美による江南機器局奪取計画に関与して、有吉明上海総領事から拳銃を借り受けて渡したことが挙げられます。また、辛亥革命勃発後に欧米から帰国した孫文を上海から香港に出迎えたというこのあたりが、まあ確認できる最初の革命関与であります。

いつから革命に関わっていったかという点も含めて考えていくと、1908年から11年頃の純三郎の活動は、ある意味空白域であります。おそらく革命への情熱を持ち始めるとともに、一方で人脈と言いますか人的ネットワークを形成し始めた

時期なのかというふうに推察しています。その1つが 1908 年以降上海で革命派と人脈を築いていった可能性ということで指摘しておきます。

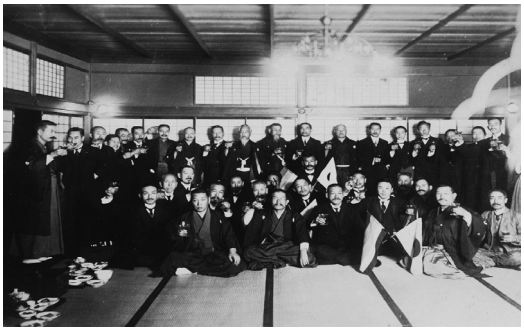
もう1つこの人脈という点について言いますと、東亜同文会との人脈というのも深めていったのではないかと推察しております。たとえば山田兄弟、この2人は東亜同文会の会員でした。東亜同文会が結成して間もない頃から会員です。そしてこちらに挙げている有吉明上海総領事、そして伊東知也、宮崎寅蔵(滔天)、彼らは全員東亜同文会の会員でした。特に有吉明は上海総領事として紹介しておりますが、1910 年の段階で東亜同文会上海支部の会員でした。山田純三郎も同支部の会員でした。おそらく有吉に拳銃借用を申し込んだのもそうした人脈があったからじゃないかと推察しました。おそらく 1911 年に表舞台に登場したのも、1908 年から 11 年のあいだに築いた人脈の影響もあったのではないかと推察しております。こちらが先ほどご紹介しました陳其美です。またあとで登場します。孫文の片腕として活躍しております。

辛亥革命勃発後に純三郎は孫文の秘書役として活躍していくことになるんですけれども、まず先ほど触れたように、帰国する孫文を香港に出迎えた。その帰りに孫文から三井への借款依頼というのを受けます。これは結局挫折するんですが、そのあと革命翌年の1913年には、孫文の公式訪日に随行員の一員として同行しています。この 1913 年の訪日の直後、袁世凱が独裁化を強めて宋教仁を暗殺したという事件も起きました。これによって袁世凱の独裁化に反対する形で 1913 年7月に第二革命が起きるんですけれども、これは失敗しまして、孫文は同じ 1913 年の9月、今度は日本に亡命してきます。それから 1915 年まで日本に滞在しました。この期間、13 年の第二革命失敗以降、袁世凱打倒が孫文の大きな目標となっていったと言われています。

第三革命前夜の時期、純三郎は満洲での工作活動に従事します。ちょうどこの頃、14 年から 15 年に袁世凱を打倒しようとする満洲方面の軍閥が現れ、彼らと連携するために満洲に渡って活動しております。しかし、軍閥の金目当てというようなことが分かりまして、これは失敗しました。翌 15 年にもやはり満洲へ渡るんですが、これもうまくいかなかった。そして第三革命終焉の頃、上海の山田純三郎宅で陳其美が、袁世凱側の刺客によって暗殺されました。

こちらは横山先生のレジメにも載ってたかと思いますが、1912 年4月に上海の日本料亭で三井物産上海支店長の藤瀬政次郎という人が孫文を招待した時の写真です。三井借款の交渉が行なわれていた頃の撮影だと考えられます。前列右から 3 人目に純三郎が写っていますね。藤瀬政次郎上海支店長もいます。純三郎の後ろが孫文。前列一番右側が森恪ですね。藤井先生のお話にも出てきました。

翌年日本を公式訪問した時に孫文を歓迎する写真が次なんですが、梅屋庄吉も写っています。中央の列で日本の旗と当時の中国の旗を持って写っている人です。梅屋庄吉は資金面で孫文に協力したということで有名ですけれども。



奈良を訪問した時には最前列中央に孫文、2列目の右端に純三郎、そして孫文通訳の戴季陶や宮崎滔天が立っている写真も撮影されています。そして1914年、袁世凱打倒のために当地の軍閥と連携を図る目的で純三郎が陳其美、先ほど触れた戴季陶とともに満洲に渡りましたが、活動拠点として利用した大連満鉄病院で写った写真があります。ただ先ほど申したようにこの活動はうまくいきませんでした。

革命家の人間らしさを感じることができるユニークな写真として、1914 年に彼ら 3 人が満洲へ渡航する前に京都の嵐山で鬼ごっこの様な遊びをしている写真も残されています。

こちらがちょうどその頃、純三郎らが満洲に派遣された時期に出された革命資金に関する書類です。左側が1915年(民国4年)2月2日に孫文から純三郎へ宛てた領収書、右側が純三郎らが奉天に出張する際の資金支払い書です。

さて、こうした形で戴季陶、陳其美、純三郎は辛亥革命後、特に第三革命の時期にお互いに協力していたんですけれども、陳其美は先ほど申したように1916年5月18日、袁世凱側の暗殺者によって、上海の純三郎の家で暗殺されます。この事件には1つ悲劇的なエピソードがあります。たまたま暗殺者が乱入して陳其美をピストルで射殺した際、近くに女中がいて民子を抱っこしていた。ところが銃声に驚いて女中が民子を地面に落としてしまったために、彼女は脳に重い障害を抱えてしまうことになったと伝えられています。純三郎はそうした民子に関して家族の前で絶えず、「民子は日中友好の宝だ。だから大事にしなくちゃいけない」とよく諭していたと伝えられています。純三郎も民子を看病したんですが、純三郎が亡くなったあとは四男の順造さんという方に引き継がれ、山田家の方に手厚く看護されて 20 年ほど前に亡くなったと聞いております。

今日のメインタイトルからしますと第三革命までということですので、時期的にはここまでになるんですけれども、その後の純三郎の軌跡について簡単に紹介してまいります。孫文は第三革命のあと中国南部の広東省を拠点として広東軍政府を作り、1917 年以後、広東軍政府などの政権を樹立していくことになります。その政権の1つであった広東護法政府の時代に、配下であった陳炯明という人物のクーデターによって政権が崩壊させられました。その時に純三郎も広東にいたんですけれども、藤田栄介広東総領事と連絡をとって、孫文を上海に逃がすということをしております。孫文が広東から逃げるに際して大きな役割を果たしたんですね。

孫文は最後の訪日を果たした後、神戸から中国天津に入ります。それから3か月後に孫文は亡くなるんですけれども、その直前に奉天軍閥の首領張作霖と会見しております。その際に純三郎は、張の日本人顧問であった町野武馬という人に孫文の安全確保を依頼しています。張作霖が孫文を拉致しないように何とぞ協力を頼むというような、身辺の保障を要求しております。

そして 1925 年3月 12 日に孫文が亡くなります。臨終には萱野長知など日本人の同志も駆けつけていたんですが、孫文の死に水をとった唯一の日本人が純三郎でした。孫文夫人の宋慶齢から「山田さん、部屋に入ってください」と呼ばれ

て、純三郎がハンカチを水に浸して孫文の唇に当てたという回想を、純三郎は自ら語っております。

こうして見ますと、第三革命後も純三郎は孫文が亡くなるまで密接に関わり、共に行動していたことが分かります。そして孫文の死に水をとった唯一の日本人ということからも、最後まで孫文に厚く信頼されていたことが分かるかと思います。

以上、資料紹介という形になってしまいましたが、山田兄弟の軌跡を、記念センターが所蔵する資料と共に、すでに著作類で明らかにされている内容も含めながら確認してきました。残された資料から、山田兄弟は実務面で孫文に協力し、孫文に深く関わってきた人達であるということが、改めて確認できるかと思います。彼らが孫文の協力者となり革命に関わっていったその背景について考えてみますと、良政の場合は瀧川具和との出会いが1つの大きな出発点であり、純三郎の場合は商売への失望や良政への思いといった内面的な部分と併せて、これは今回のご報告では仮説的なものとして挙げまして今後研究を深めねばならない部分なんですが、おそらく1908年以降、革命派あるいは東亜同文会の人脈を通じての、孫文に協力していた日本人との人脈的繋がりの形成といったものなども影響していたのではないかと思われます。

今年は辛亥革命 100 年ということで主に資金面で協力した梅屋庄吉が、ここ数年来大きく取り上げられてきておりますけれども、だいたい今のお金にして1兆円とも2兆円とも言われる資金を彼に提供したと。そういう活動が最近明らかにされてきております。一方で山田兄弟のような人達も含めて孫文に協力した日本人の活動というのも、辛亥革命 100 年を期に改めて捉えていく必要があるのではないかというふうに考えまして、今回の報告をさせていただいた次第です。主な参考文献をパワーポイントで2ページにわたって年代順に挙げておきました。ページの関係もあるので、山田兄弟を中心的題材とした研究のみを挙げさせていただいておりますことをご了承ください。

以上早口でしゃべりました。ほぼ時間通りに終わったと思います。以上で私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございます。

参考文献

・(中国書)「建国方略之一　心理建設(孫文学説)」(『総理全集』第一冊(下冊)所収、上海民智書局、1930年)。

・伊東知也『片鱗』(龍川社、1919年)。

・山田純三郎「シナ革命と孫文の中日聯盟」(嘉治隆一編『第一人者の言葉』亜東倶楽部、1961年)。

・『対支回顧録』下巻(原書房、1981年第2刷。原本は東亜同文会編、1936年)。

・佐藤慎一郎『近代中国革命史に見る酷烈さとさわやかさの中国学』(大湊書房、1985年)。

・結束博治『醇なる日本人　孫文革命と山田良政・純三郎』(プレジデント社、1991年)。

・保阪正康『仁あり義あり、心は天下にあり　孫文の辛亥革命を支えた日本人』(朝日ソノラマ、1992年)。
　⇒『孫文の辛亥革命を支えた日本人』(筑摩書房、2009年)。

・『佐藤慎一郎選集』(佐藤慎一郎選集刊行会、1994年)。

・後藤正人「東京谷中の全生庵に残る孫文撰並書『山田良政君碑』」(『月刊部落問題』275号、1999年11月)。

・馬場毅「孫文と山田兄弟」(『愛知大学国際問題研究所紀要』126号、2005年)。

・武井義和『愛知大学東亜同文書院ブックレット⑦　孫文を支えた日本人　山田良政・純三郎兄弟』(あるむ、2011年)。　など

司会　時間厳守にご協力いただきまして誠にありがとうございます。ちょうど時間通りでございます。東亜同文書院大学記念センターのほうに所蔵されております資料や写真等を中心に紹介していただきながら、山田兄弟や孫文を中心に、恵州起義から第三革命までの間のことを紹介していただきました。フロアのほうからご質問・ご意

見等ありましたら。

三好　愛知大学の三好です。内容については全体の討論の時にまた出るでしょうから、事実関係について写真等の説明に付け加えていただければと思うんですが。最初に3ページ目の「瀧川具和との出会い」というところですが、どのように知り合ったのか。つまり昆布商で行ってるかと思うんですが、これは明らかに日本の近代史から見ますと河原者の流れであるというのはすぐ分かりますね。その上で台湾総督副官と知り合う。副官ですからかなりアッパークラスなんですが、どういう形で知り合うことができたのか。それから孫文と出会ったのは平山周の紹介でと言われるんですが、平山周とはどのように付き合っていたのか。それが2つ目。従軍通訳の集合写真がありますが、これはいつどこでのものなんでしょうか。日清戦争のものも同じです。それから恵州起義に関してなんですけれども、山田良政が戦死したという時に、13 年に戦死となっていて、その前に恵州起義があって、ところが洪兆麟の告白で 18 年に処刑したことが分かる。それまで良政の生死が不明だったというお話がありましたが、何か矛盾するので、そこら辺はきちんと辻褄を合わせていただきたいと思います。

恵州起義に関しても、山田良政がわれわれの考える戦争ですからガチンコするかと思いきや、両方で取引があったのに、日本人だけよく分からなくて判断を誤って、それで捕まっちゃったという話があるんですね。そういったところを見ていきますと、革命戦争そのものも、初めから革命軍と称するものが清朝軍と称するものとガチンコするとは思えません。中国の戦闘の状況から考えるとそこは両方でナアナアの部分があって、そのナアナアの部分が分からなかったがゆえの悲劇ということも言えるだろうと。まあこれは外国人が支援する時の大きな問題だろうとは思います。

それから、上海での商売の実態がよく分かりません。三井の話で、つまり彼の回想しか出てこないもんですから、そうなると個人的な印象批評以上の域は出なかろうと思います。

それと全体に関わっちゃうんですけれども、たとえば有吉領事が拳銃3挺を授けて陳其美の江南機器局奪取計画を助ける。穏やかじゃないですね。その前の変法派脱出に関しても日本の領事が関わったりとか、孫文脱出に関わったりとか、穏やかじゃないですね。内政干渉です。同じことを朝鮮半島でやったら日本がさんざん叩かれるんですね。ところが中国の場合はよくやったと褒められる。これはやはり評価のあり方としてはいかがなものか。全体的な評価として統一的に理解しなければいけないと思います。つまり日本の外交政策全般の中で理解しなければいけないだろう。ということになると、まずそこら辺の議論を。私別に 19 世紀も 20 世紀もやってないもんですからちょっと無責任に言ってるんですけれども、そこはやはり統一的に理解しないといけないんじゃないかなと思います。

それとあと2つお聞きしたいんですが、三井物産上海支店長の招待の写真をよく見るんですが、これは六三花園でしょうか。上海の日本料亭はたくさんありますし、銀座の場合も上海支店を出してるもんですから、どこにあってどういうことをやったのかというのもちょっと気になります。孫文の公式訪日に出てる中国側の旗というのは五色旗ですね。北京政府なんですよね。そうなりますね。そしてその後に青天白日満地紅旗が出てくるわけで、五色旗はだんだん使わなくなると思うんですが、孫文が来た時に五色旗を出すというのは、これで問題はなかったのかというのが非常に気にはなります。

瑣末なことばかりでしかも事実関係の確認、本質的な質問ではなくて甚だ失礼なんですけれども、そこは意外とディテールでありながら全体に関わってくる問題かなと思いますのでお聞きしたいと思います。

司会　ありがとうございます。かなり難しい部分も入ってるかと思いますので、先ほど質問された方まであとでご質問を受け付けたいと思いますので、できるだけ簡単に、まずお答えできる部

分だけお答えいただいて、あとは総合討論のほうにいきたいと思います。ではお願いします。

武井　まず瀧川具和とどうやって知り合ったのかということについては、ちょっと詳しい記録が無いんですが、良政が台湾の田舎のほうにある行政機関の出張所と言うんですか、そこへ赴任しており、その頃に瀧川と出会ったと思われます。そのあたりがいま一つ不鮮明なんですけれども、中央本庁で会ったとかいうことは資料上の制約もあり断言できません。

それから平山周と良政との関わりということについてですが、平山周も変法派、改革派の救出の時に関わっていました。

日清戦争通訳の写真の年代なんですが、これがいつ頃なのか。写真には人名の裏書が入っていたんですけれども、年は書いてません。しかし戦争直後の明治28年（1895年）か翌年あたりに日本国内で通訳達が集合して撮った写真というふうに考えています。

日清戦争後の良政、これはいつ頃撮られたかはちょっと定かではなく、おそらく97年に中国に渡ったあとの時代であるということしか言えません。

戦死と生死不明の矛盾なんですけれども、戦死と言うよりも刑死（処刑で死んだ）と言うほうが良かったのかもしれませんが、恵州起義に関わって亡くなったという点で戦死というふうに表現しました。私の言葉遣いがおかしかったかもしれません。生死不明ということは、1900年から1918年までのあいだ良政が生きてるか死んでるか、家族にも動向が分からなかった。そういうこともありましたので生死不明と言いました。

三好　それなのに 1913 年に碑が建つんですか。

武井　この辺がちょっと難しいところなんですが、良政を顕彰するという意味で碑が建てられてるんですね。ただ私もどう解釈するか難しい部分があるんですが、「良政先生墓碑」というふうに孫文は書いていまして、本文も「戦死」というふうになってるわけなんですね。ですからおそらく戦死はしたと思われるけれどもまだ生きてるかもしれない、というような状況であったと考えられます。

三井の回想は個人的印象ではないかということなんですが、これは確かにおっしゃる通りで、純三郎がその商売に関わってどう感じたかというになっていくと思うんですね。当時の上海の日本商社が全てこういう商売をしていたかどうかということはもちろん検討していかなくちゃいけないテーマにもなってくると思います。ここでは三好先生がご指摘になったように、純三郎がその上海の商売に立ち会って現場を見て、革命活動に情熱を傾けるようになったという、ある種やはり個人的な印象であったというのは確かにそうかもしれません。

上海の料亭なんですけれども、これはご指摘の通り六三園です。上海の大きな料亭であった六三園ですね。こちらで開かれております。

変法派への日本公使館や有吉の行動は内政干渉に当たるということなんですけれども、この評価、そして梅屋庄吉が五色旗を出してるのはどういうことかということについては、ちょっと私勉強不足で、しかも時間が押してるので、改めて回答させていただきたいと思います。

以上ちょっと早口でお答えしました。

司会　ありがとうございました。まだいろいろお聞きになりたいことがあるかと思いますけれども、まずはここで打ち切らせていただきます。先ほどの挙手の方にご質問をいただいて、ご質問の受け付けを終わります。

質問者　私は全く素人なので基礎的なことを質問するんですけど、まず清国王朝の民族を教えていただきたいんです。それから孫文の家系、どういう家で育ったのかということ。それから山田良政さんの処刑理由。陳其美さんの暗殺理由。この4つをお願いしたいんです。

司会　はい、ありがとうございます。それでは今の4つを簡潔にお答えください。なかなか分からないこともあるかと思いますが。

武井　清王朝の民族は満洲族でした。孫文の家

庭は客家の系列と言われるんですが、広東省の貧しい農民の出であったと言われています。良政の処刑の理由はいろいろと伝説化されているところがありまして、恵州起義の際に清兵に捕まった。1人だけ日本人らしい格好をした人間がいるので「お前は日本人か。日本人なら助けてやる」と清兵（先ほどの洪兆麟と伝えられます）が言ったんですが、良政は一言もしゃべらなかったためにやむなく処刑したと。そういった話が伝わっております。ただやはり詳しい状況は分からないというのが正確なところです。それから陳其美の暗殺理由なんですけれども、陳其美は孫文の片腕として主に上海地方で活躍した革命家で、非常に有力な人であったので袁世凱がライバル視して暗殺をしたと、そういったことでございます。

司会　よろしいでしょうか。

質問者　良政を処刑した人と袁世凱は孫文と同志ですよね。袁世凱も革命派ですよね。つまり孫文の部下と言うか。

武井　袁世凱は清朝を崩壊に追い込んだわけなんですけど、孫文の一派ではないですね。

質問者　孫文とは派が違う？　袁世凱は。

武井　ええ、違います。

司会　そのあたりの細かいところは総合討論とかでもいろいろと、午前中のご発表等もありますから、家系などもまたひょっとするとうまく復習できる部分もあるかなと考えておりますので、総合討論のほうでその辺もまた。

質問者　そうですか。どうも。

司会　よろしいですか。ありがとうございます。それではこれをもちまして第3部を終了させていただきます。このまま総合討論のほうに移行することになっております。若干こちらのほうで会場の転換をいたしますので、よろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。